
Bクラス代表の卑怯者に憑依した話

どりーむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bクラス代表の卑怯者に憑依した話

【Nコード】

N9225X

【作者名】

どりーむ

【あらすじ】

卑怯者と名高いBクラスの代表に憑依した主人公が女装されるのを防ぐお話。

Bクラス戦後の話もしますよ！

0 問目 状況把握（前書き）

おそらく誰も思いつかなかったと思います、始めました。

ではどうぞ。

0 問目 状況把握

全く、残念すぎて涙が出てくるよ。

どうやら俺は俗に言う『憑依』というやつを経験してるらしい。

憑依した人物は根本恭二。

バカとテストと召喚獣とかいうライトノベルのキャラクターの一人らしい。

二次創作でしか読んだことないがこいつはかなりの卑怯者らしい。

しかも主人公達Fクラスに試験召喚戦争、ようはクラス対抗みたいなモンだな。

それに負けて女装させられていたはず……

おいおいふざけんな！

女装なんて絶対嫌だぞ俺は！！

こうなったら原作なんて関係ねえ！
絶対に女装から逃げ切ってやる！！

Bクラスの生徒達は語る。

二年に上がった時からあいつは何かを取り憑いたかのように人が変わった。

と。

0 問目 状況把握（後書き）

感想お待ちしています。

追記：ご指摘を受け、文体を修正しました。

設定（前書き）

設定です。

随時更新予定。

10 / 31 : ご指摘を受け、一部設定の修正。

11 / 12 : ご指摘を受け、点数の調整。

設定

憑依後の根本恭二

憑依してからなぜか顔が凛々しくなった。

髪が気に入らなかったらしく、黒く染めてオールバックにした。

憑依してから主人公が身体を鍛え始めた為、少しずつ体力が付き、細く引き締まった身体になっていく。

Cクラスの小山とは別れた。

点数

数学が500点代で化学と物理は400点代。

現国と英語は300点代

古文と歴史は90点代

総合科目は2500点代

後は原作と変わらず。

見てわかる通り理数系が得意でAクラスに

入れる成績持ちだが、振り分け試験直後に憑依したのが理由でBクラスのまま。

召喚獣

憑依後の根本がデフォルメされた感じで傭兵の様な服装。

武器はガンソード。

銃弾一発発射につき5点消費されていき、3分に一回オートリロードされる。

オートリロードは銃弾一発につき2点消費されていく。

腕輪

【覚醒】

150点消費で発動。

召喚獣の能力が底上げされ、銃弾発射とオートリロードの消費点数がなくなる。

この状態の時は召喚獣のダメージが自分にも発生、いわば観察処分者と同じ状態となる。

設定（後書き）

感想お待ちしております。

1 問目 校門前にて。(前書き)

とりあえず本編一話投稿。

鉄人って難しいですね。

1 問目 校門前にて。

「おはようございます西村先生」

「……………お前まさか根本か？」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

今校門前に立ち構えていた鉄人こと西村先生に挨拶した所だ。
どうやら驚いてるみたいだな。

まあ無理もないよな、俺だってこれ本当に根本か？って思ったもん。

「相談ならいつでも来いよ。茶くらいはいれてやる」

どうやら俺の事を心配しているみたいだ。

「機会があつたら世話になります。それよりも先生、こんな所にずつと立っているのですから生徒に用事でもあるのでしょうか？」

「あ、ああ……………」

あの鉄人がここまで驚くとは……………
こんなに驚かれるとなんだか大掛かりな悪戯が成功した時並みに嬉しさがこみ上げてくるなあ……………

正気に戻った鉄人が俺に渡してきたのは一つの封筒だった。
たしかこいつにクラス先が入ってるんだよな。

「根本」

「なんででしょうか？」

「俺は今までお前のやってきた事が本当に残念だと思っていた。現に今脅しをかけてやろうと思っていたからな」

おい、今生徒を脅すとか言いやがったぞ。
こんな教師がいて大丈夫なのか文月学園。

「だがな、今のお前を見て気が変わった。まるで人が変わったかのようにうだ。いや見た目だけではない、内面もだ。それに確固たる意志を感じる」

おいおいまずいんじゃないか？
憑依生活初日に感づかれるってどうなのよこれ。

「だからお前にはこう言うておく。高校生活、楽しむんだぞ。勿論勉強にも力を入れるように。それでは自分のクラスに行け」

なんだ、鉄人って意外といい人じゃないか。
そして俺は自分のクラスに向かった。

結果はBクラス、もちろん代表だぞ。

1 問目 校門前にて。(後書き)

感想お待ちしています。

追記：ご指摘を受け、主人公の描写を少し修正しました。

追記そのに：ご指摘を受け、文体を修正しました。

2 問目 クラスにて。(前書き)

一ヶ月に4回投稿するつもりです。

2 問目 クラスにて。

「ここがBクラスか……」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

今Bクラス前にやつと着いた所だ。

ちなみに現在時刻は8：20分。おかしいな8時にはクラスに着いてる予定だったんだが……

遅れた理由としてはたどり着く前にいろんな教師に呼び止められたのが原因だろうな。

なんかすげー心配になった。

これ絶対に憑依されるのバレルだろ、と

あとなんか女子が1人俺の前に現れるなりいきなり今の俺をすげー拒絶しだした。

「こんなの恭二じゃない！」

とか

「昨日までの恭二に戻ってよお……」

とか言ってきやがった。

それにしてもこいつ妙に馴れ馴れしい。

うん、俺こいつ嫌いだ。

なんかヒステリックなオーラ出してるし。

とりあえずお前は俺のなんなんだとかうざったいから近づくなとか言ってやったら逆ギレしてキーキー言い出したから逃げてきた。

なんだっただんだあいつは。

そして冒頭に戻るってわけ。

「さて、どんな一体反応をするのかね……」

そう呟いて俺はドアを開けてBクラスに入っていく。

なんだ、なかなかいい設備じゃないか。

まあ来る途中に見かけたAクラスの設備と比べると見劣りはしてしまうが……

Bクラスでここまでの設備なのだからDクラスでごく普通の高校の教室と同じって感じかな。

そしてクラスの奴らの視線が痛い……

もう視線耐性は付いたとか入る前にふと思ったけどこれは無理だ。
圧倒的数の視線には負ける、これは負けるに決まってる。

なんとか視線に耐えながら空いている席に座る事が出来た俺はまだ
襲い来る視線から逃げ出す為に一眠りする事にした。

てか窓際一番後ろが空いてるってどういう事だよ。普通ありえねー
だろこんな良席空いてるなんて。

「……………てください……………」

ん……………？

「起きてください……」

あ、もしかして授業中か。

これは新学期初日からよろしくない事をしたな……

「今は自己紹介をして残りは貴方だけですよ。」

「すみません、疲れが溜まっています。」

適当に言い訳を言い、俺は立ち上がりクラスの皆を見回して話を始める事にした。

「根本恭二、一応Bクラス代表だ。よろしく。」

俺が根本恭二だとわかった途端、クラスが騒がしくなった。

「ええ！？根本！？」

「こいつ根本なのか！？」

「でも根本がクラス代表かよ……」

「なんだかつこい……」

おい最後おかしかったぞ。

まあいい、俺は話を続ける事にした。

「試験召喚戦争についてだがBクラスでこの設備なんだ、十分に満足できると思う。だから試験召喚戦争はこちらからは仕掛けない方

向で考えている。だが仕掛けられたらその時は全力を持って振り返ちにしてやるんじゃないか。」

皆もそう思っていたらしく割とあっさり納得してくれた。
すると一人の男子が俺に質問をしてきた。

「お前……一体どうしたんだ？」

随分とアバウトな質問だな。
さてなんと答えればいいかな……

おっと、大事な事を忘れていた。
これやっておかないと間違いなく皆ついてきてくれないからな。

「今までにやってきた事だが……本当にすまなかったと思っている。
これからはそんな事をしないように真っ当にやっていくつもりだ。
皆の弱みも全て手放した。見た目については俺なりのけじめのつもりでやった事だ。」

まあ全部身に覚えがないから理由は全てでっち上げなんだがな。
でも酷かったぞこいつ。
いろんな人の弱みが書いてある手帳みたいな物があったんだがすげーみっしり書いてあるんだもん。すげードン引きした。

だからこの程度で許されるとは俺は思っていない。まあ建前というやつだ。

俺は言いたい事を言いきって席に座る。

クラスの皆は呆気に取られてるな。

しばらくこの空気が流れた後、先生が上手く纏めてくれた。

そしてFクラスがDクラスに宣戦布告をしたらしい。

たしかDの次はBクラス、つまり俺達に宣戦布告をしてくるはずだ。

うる覚えだが奴の戦術も知っているし対策立てておかないとな……

……

2 問目 クラスにて。 (後書き)

感想お待ちしています。

追記：ご指摘を受け、主人公の描写を少し修正しました。

3 問目 B クラスと屋上にて (前書き)

バカテストはやるべきでしょうか？

3 問目 Bクラスと屋上にて。

「Bクラス代表、根本恭二を呼んでもらえますか？」

「何か用か？」

「貴方ではなくBクラスの代表さんと呼んでほしいのですが……」

「俺が……根本なんだが………」

「うつそおおおおおおおおお！？」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

さすがに驚かれすぎて飽きが来ているのが自分でわかる。

どうやらこの人は宣戦布告の使者を任されたらしい。

わざわざご丁寧に「CクラスはBクラスに試験召喚戦争を申し込みます。」と言ってくれたんだからすごく礼儀正しい方だと思う。

「開戦時刻はいつなんだ？」

「今日の午後からだそうです。」

はて……

今日の午後と言ったら………

むむ、いい事を思いついたぞ。

我ながら素晴らしい案だなこれは。

「あ、あのお………」

「あ、ああ悪い。少し考え事をしていてな。了解した。Bクラスは試験召喚戦争を受けるよ。」

危ない危ない。

どうやら顔に出ていたみたいだな。

俺が了解したのを確認するとポニ子さん（たった今命名した）はわざわざ「ありがとございます。」とペコリとお辞儀をして自クラスに戻っていった。

それにしても礼儀正しかったな。

使者なんだからもう少し口調を強くしてもいい気がするんだが……

……

さて、開戦までにやる事を済ませておかまいとな……

そして昼休み。

俺はFクラスへと向かっている。

なぜそんな所に向かっているのかって？

Fクラス代表、坂本雄二と話をする為さ。

Fクラスに付いた俺は設備の酷さに驚きを隠せなかったが坂本がクラスにはいなく、
数人のクラスメイトと屋上へ向かったと聞いて俺は少し駆け足で屋上へと向かった。

ん、Fクラスの反応？

そんな事言っまでもないだろ？

そして屋上に着いた俺はドアを開けた。

「君の事を好きにしたいと思っていました!!」

.....なんかバカなオーラを出した奴がピンク髪の子
に欲望をカミングアウトしていた。
どうやらお取り込み中のようなのだ。

残念だが少し時間を置いてからまた来るとしよう。
俺は開けたドアを閉め、自クラスに戻ろうとした。

が

「え、ちょ、そこで見てた人戻ってきて！違う！違うからあああああ
あああ！！」

バカなオーラ、いやもうバカでいいかな。

バカのくせにこういう所は鋭いのか。

俺は閉じたドアを開け、すぐ近くまで歩いていく。

すると体格のいいツンツン頭がこちらに話しかけてきた。

「悪いな、いきなり見苦しい所を見せちまって。バカだから仕方ないが許してやってくれ。バカだから」

「ちょっと雄二！人をバカバカ言うんじゃない！！」

「いや、気にしてないから大丈夫だ。それにこいつはバカなオーラが身体から滲み出ているからな。バカなオーラが。」

「初対面の人にそこまで酷い事を言える君にはびっくりだよ！！！」

バカはツツコミスキルが高いんだな。

これはバカを見直さないといけないな。

そしてどうやらこいつがクラス代表らしい、なら話は早い。俺は早速本題に移らせてもらおう事にした。

「Fクラス代表の坂本雄二か？」

なんとなく雰囲気で察してくれたのか坂本は真面目な顔になり俺の問いに答える。

「そうだが……お前は誰だ？一年時にお前のような奴はいなかったぞ。」

あー、せっかくシリアスな感じになってきたのにこの後の展開が読めてしまった。
でも言わないと話進まないしな……

「Bクラス代表……根本恭二だ。」

.....

しばらくの沈黙。

そして屋上に集まっていた俺以外の奴らが息を揃えて叫ぶ。

[illegible]

はあ、そのリアクション飽きたよ。

3 問目 B クラスと屋上にて。 (後書き)

ポニ子さんの説明はまたの機会に……

それでは今月の更新はこれで終わりです。

感想お待ちしております。

追記：ご指摘を受け、主人公の描写を少し修正しました。

追記そのに：ご指摘を受け、文体を修正しました。

感謝とアンケート 終了しました。(前書き)

追記：注意点追加

追記その2：受付期間の縮小

感謝とアンケート 終了しました。

作者のどリーむです。

累計PV15000累計ユニーク2300突破、そしてお気に入り100件数突破ありがとうございます。

10000までは1ヶ月程かかると思っていたので驚きが隠せません。

まだまだ素人ですが頑張って執筆して行こうと思います。

そして試しにアンケートをとってみようと思います。

内容はBクラスの生徒キャラクター案です。

やはり話はBクラスがメインとなっていますのでレギュラーキャラを作って行こうと思いましたので皆さんからキャラクター案を聞いてみようかと思いましたので……

以下がキャラクターを作り出す時の注意点となります。

- ・得意科目の上限は420前後
- ・得意科目数は最高2つ
- ・苦手科目の最低限度は110前後
- ・苦手科目数は最高2つ
- ・腕輪は余りにもチートすぎない事
- ・キャラ設定を難しくしすぎない事（ある程度はOKです。
- ・総合科目の点数は2500～3300点の中で決めてください。

都合上、設定を少し修正するかもしれませんがその所はどうかご了承ください。

注意点は以上です。

色々と決めつけて申し訳ないです。

もし、点数についておかしい所がありましたらご連絡して貰えるとありがたいです。

アイデアの投稿方法は

- ・感想欄の一言の欄
- ・私宛のメッセージ

この二つの方法でお願いします。

誠に勝手ながら受付期限は11/3末に縮小させていただきます。
本当に申し訳ございません。
皆様からのアイデアお待ちしております。

それではこれからも「Bクラス代表の卑怯者に憑依した話」をよろしく願います。

感謝とアンケート 終了しました。(後書き)

リンム様、くじら様、t i s m o 様

感想ありがとうございます。

4 問目 屋上にて。(前書き)

Dr.クロ様、すいみん様、tomotomo様、ヌフウ様、流浪人様西木さんの大貝様、徒花様、神崎ミキ様、アルカイナ様、主人公を引き立てるのは脇役！様、RIA様、まあ様感想ありがとうございます。

4 問目 屋上にて。

「……そろそろいいか？」

「え、ちよ、いや、ええ！？この人根本なの！？」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

どうやら皆落ち着いてきたみたいだな。

まだバカが慌てふためいているがバカだし大丈夫だろう、うん。

そして坂本が俺の問いに答える。

「あ、ああすまない。それで一体Bクラスの代表様が底辺クラスのFクラス代表に何の用だ？」

「試験召喚戦争の件についてだ。お前ら今日の午後からDクラスと戦争するんだろ？」

「……………ああ。」

どうやら警戒されているみたいだ。

まあ元は卑怯者の根本だし仕方ないよな。

「そんなに身構えなくてもいい。実は俺達BクラスもCクラスから今日の午後から試験召喚戦争を申し込まれているんだ。」

「なんだと……？それがどうしたっていうんだ？」

「簡単な話だ。俺達と手を組まないかと聞きに來たんだ。」

「すごいじゃないか！Bクラスと共闘すればDクラスなんて楽勝だよ、雄二ー！」

バカが復活したみたいだ。
話を聞いてバカみたいに喜んでいる。

だが坂本は簡単には納得しないはずだ……

「なぜだ？普通に考えるなら戦力の高い方を、つまりDクラスと共闘した方がいいんじゃないのか？」

まあ、その通りだよな。
だがその返答は予測済みだ。

「坂本、お前昔は『神童』と呼ばれていたんだろ？だったら当然頭も回るはずだ。それに弱い戦力に超一流の軍師の組み合わせは普通に強敵と戦闘するよりも戦いづらい。そう思ったんだよ。それに……」

「それに……？」

俺は一呼吸置いてからニヤリと笑い、口を動かす。

「Fクラスと組んだ方が圧倒的に面白いからな。」

それを聞いた坂本の顔が啞然となる。

しばしの沈黙。

そしてその沈黙は坂本の笑い声で終わりを告げる。

「っははははははははは！！根本！いいぜ、共闘しようじゃねえか
！！」

そう言って坂本は手を伸ばしてくる。

どうやら握手のつもりらしい。

俺はその手を握り感謝を述べる。

「ありがとう。坂本、感謝する。」

「俺の事は雄二でいいぜ。ついでにここにいる奴も紹介しておこう。」

そう言って坂本……いや雄二が左から順に今いるメンバーの紹介をしてくれた。

「こいつは島田美波。^{しまだみなみ}ドイツからの帰国子女だ」

「よろしくね」

……………やっぱり絶壁だな。

「こいつは土屋康太。^{つちや「つた}ムツウニ」寡黙なる性職者とはこいつの事だ」

「……………よろしく」

本当に口数少ないんだな。

これでよくコミュニケーションがとれるよなあ……………

「こいつは木下秀吉。^{きのしたひでよし}演劇部のホープだそうだ」

「よろしくなのじゃ、ちなみにわしは男じゃぞ」

さっきの絶……………島田よりも女らしく見えるのはなんでだろう……………第三の性別【秀吉】は伊達じゃないって事か。

「こいつは姫路瑞希。^{ひめじみずき}本来ならAクラスにいるはずだがちょっと事情があつてFクラスだ」

「よろしく願いますね」

……………うぬ、素晴らしいメロンだ、眼福眼福。

「そしてこいつが吉井明久、とにかくバカ、救いようのないバカだ」

「うっさい、バカ雄二！雄二だってFクラスだろうが！！！」

しかし溢れんばかりにバカなオーラが滲み出てるなあ。馬鹿とはわかってたけどまさかここまでとは思わなかったな。

でも感激だな。

こうして本の中の人物と話せるんだからな。

「それじゃあ俺も改めて自己紹介するぜ。根本恭二、Bクラス代表だ、よろしく」

挨拶の終わった俺達は早速戦争に向けて作戦を立て始める事にした。

4 問目 屋上にて。(後書き)

いい感じな仲になってきてますがしっかりと悶着起こす予定です。

感想お待ちしております。

投稿キャラの発表と設定。（前書き）

まあ様、傘様、黒い人様、14日は土曜日様感想ありがとうございます。

11/12：ご指摘を受け、点数の調整。

投稿キャラの発表と設定。

作者のどリーむです。

Bクラス生徒キャラクター案のアンケート結果が纏まりました。
思った以上にアイデアが届いて驚きと感激を受けました。

そしてその中から4つのキャラクター案を採用させていただきまし
た。

それでは採用されたキャラクター案の発表です。

名前 松永弾 まつながだん

性別 男

得意科目 化学（405点）、物理（391点）

苦手科目 保健体育（99点）

総合科目 2000点前後

特徴 卑怯卑劣は当たり前と思っている。理数系を得意としているが、文系も以外と出来る(300点台)。

しかし、体を動かすのはてんで駄目で、御陰でBクラスストップにはなれなかった。だが根本が変わったのを見て学校生活が面白くなると思っっている。

実はムツツリーニと幼馴染で、そのせいかムツツリーニに良い女の情報を買った時があり逆に合コンに誘う事もある。

召喚獣 忍の格好に武器は鎖鎌。

腕輪 【自爆】

自分の科目を0にすると同時に半径五メートル以内の召喚獣に0にした科目の元々の点数を与える。(もちろん強制的に補習室行き)

投稿者 流浪人様

名前 一柳銀子
いちやなぎぎんこ

性別 女

得意科目 現代社会(412点)、古典(342点)

苦手科目 世界史(102点)

総合科目 1800点前後

特徴 間延びした口調で喋り、常にニヤニヤしている。けっこうノリは良いが全体的にうさんくさくて猫口。
ミルクティー色のゆるふわ天パをシュシュでサイドテールにしている。

ブレザーの代わりに、だぼついたカーディガンを着込んでいる。後ろ姿はかわいい。見返り美人ならぬ見返りがっかり。

テスト点数の下一桁を2にするのがマイブーム。2にするために不安要素のある大問を平気で捨てるような愉快犯。
なので平時の点数はそんなに高くない。

本気を出せばもう少し高得点を狙える……………かもしれない。

実は隠れ巨乳。

カーディガン脱いだら凄いんです。

召喚獣 黒いボロ布マント&長杖。

10点消費で炎や氷、雷や鎌鼬を生み出す。

腕輪 【因果応報】

自分が受けたダメージの10〜100%をランダムで相手にフィードバックさせる。(100ダメージ受ければ相手には10〜100のダメージといった感じ)また、腕輪の効力時間は代償にした点数に比例する。

相手の点数を地味に削る能力ゆえに、運よくいけば自滅させることも可能。

投稿者 徒花様

名前 野々村晃 ののむらみらい

性別 男

得意科目 英語W（410点前後）

苦手科目 日本史（150点前後）

総合科目 1900点前後

特徴 中二病患者。

演劇部で友達と遊びで中二病患者を演じているうちにそれが気に入り、私生活でもそのままになった。

派手好きで人に注目されるのが大好きな性格。

演技で周りの人間を引き込む才能があるためテンション上がると周りも感化されテンション上がって中二病を発症する。（バカほど発症しやすい）

同じ演劇部の秀吉とは結構仲が良い。

男子にしては長めの黒髪。右目に眼帯（伊達）をしていて右腕には包帯を巻いている。

召喚獣 何故か金と銀のオッドアイで両腕に鎖を巻いている。

その鎖を振り回し戦う。

腕輪 【閃光】

召喚獣の発光。

点数を消費して光る。

消費した点数により発光力が変わる。

多いほど強く光るが一瞬のみで少ないほど弱いが持続が長い。

本人は薄く光らせて覚醒ごっこをよくやる。

投稿者 黒い人様

名前 やまぶきかずほ
山吹和歩

性別 女

得意科目 現代国語、数学

四月時点190点 九月時点260点

苦手科目 英語W、化学

四月時点150点 九月時点230点

総合科目 四月時点1700点 九月時点2400点

特徴 基本的に明るく、努力家。

髪型は黒髪に、肩位までのストレート。運動時は一つにまとめている。

綺麗というよりは可愛いと評される。

部活は剣道部。

個性的な文月学園生徒の中では、比較的常識人で、ツッコミ役。一年生のときは、明久達と同じクラスのクラス代表だった。

一年の頃から、二年、三年のFクラス環境改善に取り組んでいて、二年Bクラスに所属してからも継続中。

勉強、部活共に真面目にしているが、要領は決して良くない。

入学時はDクラス下位レベルの成績、部活も中学時代は三年間補欠だった。

だが、勉強面では鉄人の地獄の補習を真面目に受けたこと、成績が学年最下位で留年しかねない明久の教師役を務めたことにより、一年生最後の振り分け試験ではBクラス上位の成績にまで上昇している。

自分の勉強方法を確立し、現在も成績上昇中。

剣道についても、中学時代の苦難を糧に、高校では次期主将候補になるまで成長している。

基本的に自己主張するタイプではないが、嫉妬に狂うFFF団や、翔子に毅然と立ち向かったり、昼飯を水と塩だけで済まそうとする明久の生活を根気強く改善させようとするなど、芯は強い。

善人だが人の言う事を頭から信じたりはせず、しっかりと自分で判断し、根に足を着けた考えをする。

一方、自分が何者かから被害を受けても、相手が反省したらあっさりと許してしまうこともある。

クラス代表という立場とお人好しな性格により、様々な厄介事に巻き込まれてきた。

召喚獣 弓道着を着ている。武器は弓だが本人は剣道部なのに弓が武器なため、四月時点では不慣れ。

腕輪 【献身】

自分の点数を消費して、消費分の点数を同召喚フィールドにいる味方の点数に加算する。

ただし、召喚フィールドが消えると加算された点数は元に戻る。

腕輪を使用した本人の点数は消費したまま。

相手クラスは一人を囿にして、他の人は召喚フィールドから離れれば良いため、使い勝手は良くない。

400点に達している科目がないため、現段階は使用不可能。

投稿者 RIA様

以上の四つのキャラクターを使う事に決定しました。

これからもBクラス代表の卑怯者に憑依した話をよろしく願います。

投稿キャラの発表と設定。(後書き)

たくさんの投稿ありがとうございました。

感想お待ちしております。

5 問目 混沌の戦場にて。(前書き)

モナカ様感想ありがとうございます。

5 問目 混沌の戦場にて。

「そこまで、ペンを置いてください。テストを回収します。」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

俺は点数を自分自身の点数にする為に補給試験を受けていて、たった今試験が終わったところだ。

姫路さんも一緒に試験を受けていた。

理由を聞いたところ、振り分け試験の途中で倒れてしまい無得点状態だったらしい。まあ、知ってるんだけどな。

そして俺達は採点が終わるのを待ち続けていた。戦局はどうなっているんだ……？

「さあ来いこの負け犬が！」

「て、鉄人！？ い、嫌だ！ 補習室は嫌だ！！」

「黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

「お、お願いだ見逃してくれ！ あんな拷問耐えられる気がしない！」

「拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わ

る頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう。」

「お、鬼だ！ 誰か、助けっ……うわあああああああああ
！！！！！」

戦死したら補習室……もとい拷問部屋行きか……恐ろしいったら
ありやしないや。

「よし、島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？ 作戦？ なんて伝えるの？」

ここで僕が出す作戦は、ただ一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし！！」

殴られた。しかもチヨキで。

「目があ！ 目があっ！」

「目え覚ましなさいこの馬鹿！ アンタは部隊長でしょうが！ B
クラスの援護だってあるのよ！？ どうしてウチらだけ逃げなきゃ
いけないのよ！！」

い、言われてみればたしかに……よ、よし！

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「今度はなんて伝えるの？」

「全軍突……」

「あのー」

むむ、人がせつかくカッコ良く決めようとするのを邪魔する奴は
誰だ？ あれ？ 君はたしか本陣に配置されているはずの横田君じ
やないか。

「代表より伝令があります。」

雄二に渡されたであろうメモを見ながら横田君がハキハキとした声で告げる。

「部隊員 戦死 コロス」

「全軍その場に待機だああああ!!」

気がついたら僕は部隊員全員に待機命令を下していた。僕の身も守れるし、戦死者も減るしいい事尽くめだと思ったからだよ？ 決して自分の命が何よりも惜しいとかそういう事じゃない!!

「吉井……………」

点数の反映が無事完了した俺はBクラスに向かっている。

途中何度かCクラスの生徒やDクラスの生徒に遭遇したがなんとか最小限の被害で倒す事ができた。使ってみてわかった事だが召喚獣の操作って思っていたよりも難しい。

慣れない間は力押しか、物量で攻めるなどの手段を取らざるを得ないだろう。

「って俺は誰に説明しているんだ？」

そんなよくわからない何かを受信しながら走っていた俺は無事にBクラスにたどり着く事ができた。

俺がクラス内に入ると1人の女子がこちらに気づいたらしく話し

かけてきた。

「あ、根本君！ それじゃあ……」

「ああ、バトンタッチだ。ありがとな、山吹」

彼女は俺の代わりに総大将役を務めてくれていた『山吹和歩^{やまぶきかずほ}』なんでも一年時にクラス代表を務めていた、とクラスの何人かがそう言っていたので俺が補給試験を受けている間、俺の代わりに総大将を務めてもらっていたというわけだ。

そんな簡単に決めていいのか？ と言われても仕方ないだろう。開戦まで時間がなかったからな。

「さて山吹君、戦況はどうなっているのかね？」

「なんでそんな偉そうな感じになるの？」

「こう……雰囲気って大事だろ？」

「そんなモンなの？」

「そんなモンだ」

なんとなく少しだけふざけてみたら山吹は本当に雰囲気に乗ろうとしている。

「げ、現在、戦況は我がBクラスと友軍……」

「さて、冗談はここまでにしないな」

すると山吹は少し固まり、そしてみるみる内に顔を赤くしていった。あっぱは！ 山吹で遊ぶの面白いなー！！

「そういう冗談を言っている状況じゃないんですよ！ わかってるんですか、根本君！？」

「悪い悪い、それで戦況はどうなんだ？」

「本当、根本君とは思えないわ……今の所は順調に進んでるわ。既にDクラスは落としているし。でも……」

「でも？」

「Bクラスは大きな戦果を特にとつてないの。なんというか……Fクラスがいいところ取りをしているような感じがして……」

「Fクラスは最低クラスだからな。いいところ見せて設備あげようと必死なんじゃないか？」

「それだけならいいんだけど……」

「前線部隊からの報告です！」

前線から伝令役の工藤信二くどうしんじがやってきた。
顔の表情からして悪い話ではなさそうだ。

「Cクラス前線部隊の殲滅が完了しました。残すは本陣のみとなつています！」

「わかった、じゃあ俺も行くぞ」

俺は工藤と共にCクラスに向かった。

そしてCクラスに着いた俺と工藤は勢いよく扉を開けた。
クラス内にはこの前俺に馴れ馴れしく話してきた女子とその護衛がBクラス前線部隊に囲まれていた。

「あれ？ Cクラスの代表ってお前だったのか」

「あ、あんたは！」

「全部聞いた話だけど、お前頭悪いよな。馬鹿の一つ覚えみたいに

突撃を繰り返してたらしいじゃねえか」

「う、うるさい！ 全ては恭二の目を覚まさせるためよ！！」

「いや、覚ますも何も俺根本だし、というかお前私事で戦争ふっかけてきたのか？ 本当に馬鹿だな……」

いや精神は根本ではないですけどね。そんな事を思いながら俺がこいつに罵詈雑言を浴びせているととうとう我慢できなくなったのか、ヒステリックに叫び始めた。

「こうなったら決闘よ！！ 布施先生！ Cクラス代表小山友香が、Bクラス代表根本恭二に化学で勝負します！！」

「始めからそうしていればよかったんだよ……だって」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

Cクラス代表 小山友香 化学 194点

V S

Bクラス代表 根本恭二 化学 421点

「すぐに終わらせられるからな」

「「「よ、400オーバー！？」」」」

俺の召喚獣が手に持つガンソードであいつの召喚獣の頭を撃ち抜き、決闘はすぐに終わった。

「さて、戦争も終わった事だし、戦後対談でも始めますか？」

「あ、あなた何をしているの？　まだ戦争は終わっていないじゃない」

「はあ？ 何言ってるんだよ？ Dクラスが負けてCクラスも負けただからこの戦争は終わりだろ」

全く何を言っているんだこいつは。負けてとうとう頭でもおかしくなったのか？

「だからまだ残ってるじゃない……」

「だから残ってな——」

すると突然Ｃクラスの扉が吹き飛ばされたかと思うと、まるで魔術師のような格好をした生徒達が飛び込んできた。

[illegible]

「死の鉄槌をおおおおおおおおおお！！！！」

な、なんだこいつらは！？

俺達は突然現れた異様な集団にあつという間に囲まれてしまった。

くそ！ 一体なんなんだこいつらは！？

「悪いな、根本」

「さ、坂本！」

扉が吹き飛ばされた入口から現れたのはFクラス代表の坂本雄一。

「どういう事なんだ坂本!!」

「戦争前にお前に今回の特別ルールを話しただろ？」

「たしか、今回は同時に多クラスが戦争を行うからB&Fクラス対D&Cクラスのタッグマッチだと言っていたな……」

「ああ。でもそいつは少し違ってな。実際はB対F対D対Cのバトルワイアルだ」

「そういう事か……だからこいつはまだ終わってないと言っていたのか」

くそ！　しっかりと自分でルール確認しておくべきだった!!

「さて、これだけの人数差だ。殺れ、お前ら!!」

「」「」「うおおおおおおおおおお!!」「」「」

ま、まずいこのままだと殺られる！

「勢いに惑わされるな！　所詮Fクラスが相手だ！　一点集中で逃げる事だけを考えろ!!」

俺達は出口に向かって一斉に走り始める。

「サモン試獣召喚!!」

Fクラス　須川亮　化学　63点

横溝浩司　化学　58点

よし、勢いは良くてもやっぱりFクラスだ!!

俺達はなんとかCクラスから脱出する事に成功した。この調子なら……………

「ここから先は通せん!!」

「きゃああああああああああ!!」

突如こちらに飛んでくる熱線。

その熱線を浴びて二人の生徒が戦死してしまった。

「だ、だれだ!？」

飛んできた方向にはピンクの長髪に頑丈そうな鎧、身丈程に大きい大剣を軽々と持った召喚獣が立ち構えていた。この召喚獣まさか…………

「姫路か!」

「根本君! あなたは人としてやってはいけない事をやってしまいました! 絶対に許せん!!」

あの姫路がここまで怒るなんて…………それに俺、何かしたのか!?
ってそんな事言ってる場合じゃない!!

「船越先生! Bクラス代表根本恭二が、Fクラスの姫路瑞希に数学で勝負します!!」

「サモン試獣召喚!!」

Bクラス代表 根本恭二 数学 537点

VS

Fクラス 姫路瑞希 数学 379点

「点数に余裕のあるやつは俺と残って逃げる奴らの時間稼ぎだ!!」

「ご、500点オーバーなんて……」

「悪いが全力でやらせてもらう! 【覚醒】!!」

すると俺の召喚獣から青いオーラが溢れ始める。

「そ、そんな!」

姫路の召喚獣を圧倒する俺の召喚獣。

しばらくしてクラスに撤退した1人がこちらに走ってきた。

「代表! 残った奴以外はクラスに撤退完了したぞ!」

「わかった! よし、俺達も撤退の準備だ!!」

「しんがりは俺に任せときな!! 遠藤先生、Bクラス野々村晃がここにいますFクラス全員に英語で勝負するぜ!!」

そっぴいながら前に躍り出たのは時間稼ぎとして残った1人の野々村晃。男子にしては長い髪、右手に包帯を巻き、眼帯をしているな
んとも厨二な奴だ。

「とうとう俺の力を使う時が来たようだな……」

「なっ、まさか貴様!?!」

「そう! 俺にはまだ隠された力があるんだよ!!」

そう叫びながら包帯を取り右手を高く掲げる野々村。

「サモン試獣召喚！！！」

パチンツ！と指を鳴らすと同時に現れる野々村の召喚獣。金と銀のオッドアイで両手に鎖を巻いている。

Bクラス 野々村晃 英語 424点

「な、根本以外にも400点オーバーがいるだと！？」

「一体どうなっているんだ！！」

「俺達Aクラスを相手にしてるんじゃないよな！？」

「全てを包み、全てを消し去る！！ 一撃必殺のおおおおおお！！！」

野々村が何か呪文のようなものを呟くと、野々村の召喚獣が力を溜める動作を始める。その時、相手にわからないように野々村は俺達に合図をしてきた。

そして野々村は大きく叫ぶ。

「イレイザーフラッシュ【閃光】だあああああああああああああああああああ
あ！！！！！！」

直後、野々村の召喚獣から強い光が辺りを包んだ。

「ぐあああああああ！！」

「な、なんて力だ！！」

突然の光に敵は視界を奪われ、俺達はその隙に撤退した。

時間稼ぎの部隊がクラスに着いた瞬間、戦争終了の合図が鳴り響き決着は明日へと持ち越された。

それにしても坂本の奴……卑怯の称号はあいつに譲ってやるとしよう。

5 問目 混沌の戦場にて。 (後書き)

山吹さんと野々村君が登場しました。

感想お待ちしています。

6 問目 二度目の戦場にて。 〽勝ち取った信頼〽 (前書き)

a s a 様、 t o k i 3 4 5 6 様、 ? 紫苑? 様、 流浪人様、 徒花様、
オレンジ様、 R I A 様、 黒い人様感想ありがとうございます。

6 問目 二度目の戦場にて。　　く勝ち取った信頼く

「さて、どうするか……」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

俺は今クラスで午後の試召戦争の作戦を考えているんだ。

原作のBクラス戦での坂本の作戦ってたしか姫路を軸に戦場を掻き回してその隙に土屋が俺を奇襲するって作戦だったな。

でも原作根本が姫路の弱みを握って動けない状況だったから、変わりに吉井がその役をやったんだよな。たしかBクラスの壁を隣のクラスからぶっ壊して気を引きつけてたな……

いや実際の所、数多くの二次創作の情報から考えた事で実際の原作は知らんけども。

なんにせよ原作通りに事が動く事を願うよ。

でも一応何かあった時の為の策も考えておかないとな……

そしてあつという間に戦争の時間だ。

「よしおそらく敵は姫路を主軸に暴れるつもりだろう。姫路がいたら絶対に一人で戦おうとするな！ 最低でも三人で戦うんだ！ わかったな……！」

「つまりしばらくは耐えろ、って事か？」

この作戦について立ち上がって質問をしてきたのは松永弾。まっながだん昨日、戦力確認のために各々の点数を教えてもらった時に俺の次に点数が高かった男。つまりはBクラスのNo.2というわけだ。

「ああ。姫路は敵にとって貴重な戦力だから戦死させるような事は絶対にしないはずだからある程度削れば補給に向かわせるはず。そこを突くんのだ」
「なるほどな……」

単純だが一番有効な作戦だと俺は思う。納得してくれたのか松永はもと座っていた席に座ってくれた。

「他に質問はないな？ よし、すぐに準備を始めてくれ。もうすぐ時間だからな」

なんとしても勝つ、女装を絶対に回避するためにも。

「野々村がやられたぞ！」

「あのバカ、一人で突っ込むと言われてたのに振り切って突撃しやがった……！」

「くそ……防戦一方じゃないか！」

前線部隊隊長こと俺、松永弾は今の状況にかなり焦っていた。

「吉井の召喚獣が敵の体制を崩した所を姫路が叩く。単純にして最

も恐ろしい戦法だ……」

なんとかして耐え切らないと負ける……！　と、思っていたら山吹の召喚獣が姫路の召喚獣を弓で狙い撃ち、矢が右腕に突き刺さった。

「手甲の隙間に……？　やった！」

「よくやった山吹！　よし、姫路に集中攻撃だ……！」

「そ、そんな！」

「姫路さん下がって！」

姫路に向かった集中攻撃を吉井の召喚獣が木刀で全ていなしていく。くそ！　観察処分者つてのがこんなに厄介とはな……！

「姫路さんは補給に向かって！　ここは僕達で死守するから！」

「で、ですが！」

「大丈夫だって！　それに僕……」

そう言っ吉井は構える。

「日本史は得意なんだ！　福原先生、Fクラス吉井明久がここにいるBクラス全員に日本史で勝負します！」

そして教科が変わると同時に各々の点数も変わっていく。

Fクラス　吉井明久　日本史　209点

「……な、なにいいいいいいいい……！」

「明久が200点越えじゃと……！」

「すごいじゃない吉井……！」

「すごいです吉井君!!」

「ちっ！ 点数の高い観察処分者とはな……」

思わず舌打ちをする俺。後ろで山吹が誇らしげに

「当然です！ だって私が教えたんですから」

「山吹！ お前はどっちの味方なんだ!!」

それを聞いた俺は即座にツッコミをいれ、山吹は、はっ！と思い出したかのように縮こまる。

「ふっははははははははは！ 今の僕に敵はいなああああああ
ああああい!!」

「吉井に続けー!! 総員突撃だあああああ!!」

勢いに乗ったFクラスがこちらに突撃してくる。だが甘い!!

「今だ、伏兵部隊!!」

俺の合図で隠れていた伏兵部隊があらかじめ確保しておいた船越先生を連れて現れる。

そして瞬く間に福原先生をこの場から連れ去って行き、残った女子生徒が吉井に勝負をしかける。

「船越先生、Bクラス一柳銀子がFクラス吉井明久に数学で勝負しまゝす。」

「……………ゑ？」
サモン
「試獣召喚」

予想外の出来事に啞然とする吉井。そんな事を気にせずに一柳は勝負を仕掛ける。

Bクラス
一柳銀子
数学
192点

V
S

Fクラス 吉井明久 数学 59点

「それ鎌鼠」

一柳の召喚獣が手に持つ杖から鎌鼬を発生させ、吉井の召喚獣を切り刻んでいく。

「うぎゃ あああああああああ！ 体がっ！ 体が切り刻まれていくぅぅぅぅぅぅぅ！」

そういえば観察処分者ってダメージのフィードバックがあるんだっ
たな。でも吉井だしなんとかなるだろ。

「総員撤退だあああああああ！」

吉井が戦死したのを見た途端Fクラスの奴らは一目散に逃げていった。

「アキくん、大丈夫かな……」

「山吹……いや、もういい」

どこからか現れ、鉄人に文字通り持つていかれた吉井を心配している山吹に俺はツツコミを入れる氣も起きなかった。

さて、敵本陣に乗り込むとしますか。

どうやら前線はなんとかあったみたいだな。俺は前線からの伝令を聞いて一安心した。

「姫路も補給試験中ではない今がチャンスだな……よし、全軍突撃するぞ！」

俺とその近衛部隊は敵本陣へと向かっていった。

「よお、坂本」

「っ！ テメー根本！！」

Fクラスに着いた俺は前線部隊に囲まれている坂本に声をかけた。

「何！？異端者根本を討ちとれええええええええええ！！」

クラスに残っていたFクラス生徒が俺を肉眼で確認した途端こちらに突撃してきた。とはいっても所詮Fクラス。

俺にたどり着く前に他の奴らに負け、鉄人に確保されて連れていかれる事となった。

「さて、いよいよお前を守る奴らもいなくなつたわけだがその前に一つ聞かせて欲しい。昨日からあいつらはなぜ俺を目の敵にする？」

「簡単な事だ、お前この前小山をつつただろ？」

「小山……？ ああ、あのCクラスのヒステリックな代表か。それがどうした？」

「それをFFF団に教えてみたらどうなる？」

「奴らは俺の首を狩ろうと必死になる………」

「ご名答。ちなみに姫路は同じ女性として小山をいきなりつたお前が許せなかつたんだとよ」

「なるほどな………」

というか原作根本と小山つて付き合つてたんだな。そうすると俺のやった事つてかなりまずい事なんじゃないのか……？

「お前の頼みに答えてやつたんだ。こっちの頼みも聞いてくれよ」

坂本はニヤリと笑い俺にそう告げる。

「可能ならやってやるよ」

「なに、簡単な事だ。俺に………」

坂本は腕を高く上げ指を鳴らす。すると開いていた窓から土屋と教師が飛び込んできた。

「俺にその首をくれ」

「……大島先生、Fクラス土屋康太がBクラス代表、根本恭二に保健体育で勝負を申し込む」

「ちつ、最後の悪あがきつてやつかよ！」

「「サモン試獣召喚」」

Fクラス 土屋康太 保健体育 441点

VS

Bクラス代表 根本恭二 保健体育 207点

わかつてはいたがなんて点数だよ！ ムツツリー二の名は伊達じやないって事か！！

土屋の召喚獣は手に持つ小太刀を構え、一瞬にして俺の召喚獣に接近する。

「くそ……ここまできて……………！」

俺はやられたと思い、目を瞑って完全に諦めていた。だがいつまで立っても戦争終了の合図が鳴らない。どういう事かと思い、目を開けてみると……………

そこには土屋の召喚獣が戦死していて、無数の召喚獣が俺の召喚獣を守っている光景だった。

「な、なんで……………」

「そりゃ前のお前だったらこうして助けようなんて思いもしなかつ

ただろうな」

「でもお前は俺達に誠意を見せてくれた」

「ちゃんと改心してたみたいだね」

「今までみたいに俺達の弱みを握る手段じゃないって事はよくわかったよ」

「だから俺達は」

「……お前を信じる」

クラスの皆が自分の気持ちを俺に伝えてくれた事に、俺はなんだから嬉しくなった。

「ちっ、ここまでかよ……俺達FクラスはBクラスに降伏する」

坂本は最後の策が失敗した事を確認すると簡単に降伏してきた。やった……勝ったんだ……

これで俺は女装を回避できた！できたんだ！！

6 問目 二度目の戦場にて。 〽勝ち取った信頼〽（後書き）

松永君と一柳さんが登場しました。

ラストのシーンの展開が強引だった気がします。

それでは今月の更新はこれで終わりです。

感想お待ちしております。

追記：ご指摘を受け、一部シーンの修正。

7 問目 戦後対談にて。（前書き）

たくさんの感想を送ってくださりありがとうございます。
今回から感想を送ってくださった方の名前を出すのはやめておきます。

7 問目 戦後対談にて。

「集まったな」

「言わなくてもわかるわよ」

「お、おい落ち着けて……」

「……………ちっ」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

俺達クラス代表四人は一つの部屋で集まって話し合いをしている。
所謂、戦後対談というやつだ。

「じゃあまずはFとDの交渉ね」

小山がそう言うのと坂本と平賀が話を始める。

「そんじゃこっちも始めますか」

「わ、わかってるわよ!」

そして俺と小山の戦後対談が始まる。とは言ってもCクラスの設備が悪くなるだけなのだ。

「んじゃCクラスの設備を落とさせてもらう。それだけ」

「……………それだけ?」

「ああ、それだけ。強いて言うなら勝手な事するな。数少ない知識が無駄になっちまうだろ」

「知識?」

「……………なんでもない」

危ない危ない。思わず口を滑らす所だった。

それに小山は俺を元の根本、つまり原作根本に戻そうとしているらしいからな。知られる事はないだろうけど用心しないとな。

「ほら、向こうも終わったみたいだぞ」

「そうみたいね。それじゃ私と平賀君は帰らせてもらうつわ」

そう言っつて平賀と共に部屋を出ていく小山。願わくばこれ以降二度と出会う事がないように祈る。

「さて、次は俺達だな」

「……ああ」

坂本はぶすつとした顔で頷く。

「おいおい、やる気のない顔だな。そんなんじゃクラス設備下げんぞ？」

「……なに？ どういう事だ？」

「どういつも何も、俺はFクラスの設備を落とすつもりはないって事だ」

「……代価は？」

「そうだな……一ヶ月毎に俺達と模擬試召戦争してくれ。Bクラスってのはよく狙われるような位置だからな」

「本当にそれでいいのか？」

「いいんだよ。それに……」

「それに？」

「姫路の体調の事もあるだろ？」

「根本……お前……」

そう言っつて俺は左手を前に出して坂本に向けて最高の笑顔でサム

ズアップした。ふつ、決まったな……………

って俺は何を考えているんだ。野々村でも移ったんだろうか？

「最高に気持ち悪いぞ。」

坂本の一言で思わず体制を崩す俺。

「ひ、ひどいぞ坂本！ 人の好意を素直に受け取らない奴は嫌われるぞー！」

「…………だが本当に改心したみたいだな。前のお前なら代価が卑怯な内容だっただろうしな。わかった、その内容で決定だ」

「…………わかってくれるならいいんだ。よし、対談内容はこれで決定。いいな？」

「ああ」

そして戦後対談は無事に終わった。

明日からまた普通に学園生活の始まりだな。クラスの奴らから信用してもらえたり学園生活の第一歩は順調だな。よし！

「今夜は豪勢に行くぞー！」

「うっせえから隣で叫ぶな！」

「わ、悪い…………」

ちよつと調子に乗りすぎたな…………

そして夜。俺は独り身なのにたくさんの食事を作ってしまい深く

後悔していた……

「無理無理無理無理、もう無理食えねえ……なんでこんなに作ったんだろう、馬鹿じゃないか俺……」

とりあえず保存不可能そうな食べ物には食べよう……後は冷蔵庫行きた。

「……すんげー気持ち悪い」

しばらく弁当作るのはなさそうだな……

7 問目 戦後対談にて。（後書き）

短いうえに性格が変わってる気がします。

感想お待ちしております。

8 問目 ある日の学園にて。（前書き）

総合評価1000pt、お気に入り登録300突破、累計PV100000アクセス突破、ユニーク20000人しました。
皆様本当にありがとうございます。

今回はRIA様の小ネタを少し使用させていただきました。

RIA様ありがとうございました。

8 問目 ある日の学園にて。

「とりあえず詰め込んだけど……どうしたものか………」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

俺は今、昨日作り過ぎた料理を適当に弁当に詰め込んだ所だ。いやでもいくら身体が育ち盛りの男子高校生とはいえ一人で食える量じゃないだろ、これ。

「……とりあえず学校行こう」

とりあえずこの事は飯時に考える事にしよう。俺はさっさと準備をして家を出た。

「ん……なんだこれ？」

俺の足元に落ちていたのは一通の手紙。

「これって……」

思い当たるのは試召戦争時に原作根本が姫路の鞆の中から盗んで脅しの材料にしていた、おそらく吉井宛のラブレター。

「それで……間違いなさそう、だな」

手紙の裏には女性らしい可愛いと呼べるような字で『吉井明久さまへ』と書かれている。

「……………よし」

俺は手紙を持って吉井の下駄箱があるFクラスの下駄箱に向かった。

「吉井、吉井……っと、ここか」

そして俺は手紙を下駄箱に入れて教室へと向かった。うん、いい事した後は気分がいいな。それに誰にも悟られずに、という所がまた気分がよくなる所だ。

「そんじゃ教室に向かうとしますか」

「あー、これは……………」

あつという間に昼休み。俺は自分の昼食が入った重箱を前に呆然としている。

「量が多すぎる……こんなにあつたかよ？」

もしかしたら俺、今日死ぬかもしれんな。死因は食べ過ぎって所か。普通ならそんな事で死ぬのはあり得ないんだが、生憎ここはなんでもありのドタバタ学園コメディ、バカテスの世界だ。

「生まれ変わるなら………お金持ちがいいかな」

「ね、根本君、大丈夫？　なんだか死にかけてるけど？」

心配そうに声をかけてきたのは、クラスメイトの山吹。

「気にするな、単なる食べ過ぎだ」

「食べ過ぎって………大きな重箱だね」

自分でもそう思う。あのときの浮かれた自分を叱りつけてやりたい。

「でも、ほとんど食べてないみたいだけど………胃の調子が悪いなら、胃薬貰ってきたほうがいいと思うよ？　保健室付き添おうか？」

「いや、胃の調子が悪いわけでなく、本当に食べ過ぎで苦しいだけだ。朝にも減らしてきたんだが………」

「食べ過ぎでも心配だけど………食べられないなら無理しないほうがいいよ」

「それがそうもいかないんだ。実は」

浮かれた自分を晒すのは嫌なのだが、仕方なく事情を話す。

「そっか。根本君偉いね」

「偉いつてなんでだ？」

「だって、食べ物を残さず頑張って食べようとしているでしょ？
あたしも子供の頃、嫌いな物を残してよく家族に叱られて」

そこで言葉を止める山吹。

「いや、嫌いな物は誰だってあるからな」

若干話しがズレている気もするが、そこには触れないでおく。

「えっと、そうじゃなくて、根本君の弁当よね。それだったら、
みんなにちよつとずつ食べてもらえばいいんじゃないかな？」

恥ずかしかったのか少し無理に話を戻した山吹。
だが山吹の出した提案はかなりいい案だった。

「そうだな……一人じゃきつくても、数人がかりなら負担は随分減

るな。けど……」

そんなのどうやって頼もうか？ 憑依前の根本は嫌われ者、この前の試験召喚戦争で一応の信頼は得られたが、それはあくまでクラス代表としての信頼だと思う。

親しい人という存在はまだほとんどいないと言っていい。逆に憑依前の根本と親しい人、特に小山とは疎遠になっている状態だしな。

「それなら、あたしに任せて」

俺が悩んでいると山吹は俺にそう告げてクラスにいる生徒に話しかけていった。

「悪いな根本。今日は昼飯が少なかったから助かるぜ」

「根本君って、料理できるんだね」

「わ、私のより美味しいかも……」

山吹がクラスに残っていた人の内、数人を連れてきたおかげで、弁当の中身は順調に減っていく。

しかもなぜかは知らないが予想以上に好評だ。そこまで上手く作れたつもりはなかったんだがな。

「すまん、助かった山吹」

「いやいや。あたしも新しい料理の作り方を教えてもらっただし」

……そういえば、こうしてクラスメイトと一緒に昼ご飯を食べるのは初めてだな。今まで試験召喚戦争とかでどたばたしてたし。

「根本君って毎日、弁当自分で作っているのかい？」

「……………毎日これ位作ってくれると俺の胃袋的にはありがたいんだがな」

「野々村君、図々し過ぎだよ。それと今日は何キャラなの？」

「……………無口で冷静キャラだ」

「あはは。次はなんだろうね」

それは土屋と被ってるぞ、野々村。

そして一柳の間延びした口調が重なってなんだかすごい脱力した気分になる。

でもこんな気分になるのもなんだか楽しい。こうやってみんなとちよつとずつ仲良くなれば……………

「もしかして山吹、その考えもあつたのか？」

「え？ 考えって何が？」

「やれやれ。山吹って単なるボケキャラだと思ってたんだけどな」

「ええっ！？ ボケキャラって、そんなことないよっ！」

俺はこのチャンスを見逃さなかった。

「え…………？ 違うのか？」

すると周りにいた奴も似たような事を思っていたらしく、俺に話を合わせてくれる。

「ほらあれだ。天然ボケの人は自分のことをボケだと分らないってことだ」

「でも、分かった時点で、天然じゃないよね」

「って、それじゃあ肯定しても否定しても駄目ってことじゃない！」

「……………そういう運命だな。諦めろ山吹」

「そんなのいやー！！」

山吹は顔を腕を振り回して叫んだ。やっぱり山吹で遊ぶのは面白いな。

でも、しばらく山吹には頭が上がらないかな。

「ちょっと、飲み物買ってくるわ。勝手に食べてていいぞ」

そう言って俺はクラスから出ていく。一応クラスの設備に飲み物はあるのだが俺はあまり好きではないのだ。

『吉井はどこじゃあああああああああああ！！』

『サーチ&デス！　サーチ&デス！』

うおっ、なんかFクラスの奴らが血眼になって吉井を探してやがる。

っつかしよく叫ぶなあ。こう叫ばれるとお腹に響いて気持ち悪く……やばい気持ち悪くなってきた。

「さっさと戻ろっ……」

一刻も早くここよりも静かな所へ向かう為に俺は少し歩く速度を早める。だがそんな俺の周りでFクラスの奴らは更に騒ぎ始める。

「吉井を包囲したぞー！！」

「だ、だからもう手紙は持っていないだってばー！！」

「持っていないならどこに隠した！？」

「さあ言え！ はりー！ はりー！！」

そろそろ限界だ。丁度いい所に数学担当の長谷川先生もいる。

「長谷川先生…… Bクラス代表、根本恭二が目の前のFクラス全員に模擬戦闘を申し込みます」

「……わかりました。許可します」

どうやら察してくれたみたいで助かった。突然フィールドが現れた事に驚いたFクラスの奴らは辺りをキョロキョロ見回している。

「こっちだよ。こっち」

「き、貴様は……根本……!」

「丁度いい、貴様にはまだ鉄槌を降していなかったな……殺るぞ、お前ら……!」

『おおおおおおおおお……!』

「丁度いい? それはこっちの台詞でもあるんだよ……!」

『サモン
試獣召喚……!』

Bクラス代表 根本恭二 数学 491点

VS

Fクラス FFF団 数学 平均58点

補給テストの出来はあまりよくなかったみたいだがFクラス相手ならこれでも十分だな。

俺は即座に召喚獣を敵に向けて突撃させて、敵の召喚獣を切り裂いていった。

怒りの力のせいか今までよりも召喚獣の動きがよく、あっという間に残る敵は一体となった。

「くそっ! この物量でも勝てないのかよ……!」

「お前で最後だな？ 悪いけど今の俺は非常にむしゃくしゃしている。フィードバックがない事をありがたく思えよ」

そう言つて俺は召喚獣を滅多刺しにする。

相手が青ざめた顔をしているがそんなの知らん。

すると俺の召喚獣を後ろから羽交い締めにするのが出てきた。吉井の召喚獣だ。

「いくらなんでもやりすぎだよ……もしもフィードバックがあつたら………」

そう言つて身震いをする吉井。どうやらこの光景を他人事には思えないらしい。観察処分者でダメージのフィードバックがあるから止めに来たんだろうな。

だがそんな事は知らん。もう一度言つ、知らん。そしてある事を思いついた俺は吉井に話を持ちかける。

「吉井」

「なに？」

「昼飯、欲しくないか？」

「根本様！ さあこいつを好きなだけ滅多刺しにしてください！！」

そう言つが早いかあつという間に俺の召喚獣の拘束を解き、俺に跪く吉井。一流忍者も真つ青の動きだったぞ……

「それじゃあ続きを……」

始めようとしたら何処からともなく鉄人が現れ、戦死した奴らを連れ去ってしまった……

「あー、持ってかれたか。ま、いつか」

「えっと、それじゃあ昼ご飯は……？」

「ん？ ああ、別にいいぞ。というかまだまだあるから是非食べてくれと懇願するわ」

「や、やったあああああああああ！！」

飯にありつける事がすごく幸せらしい。吉井は腕を上げてその場でぴよんぴよんとジャンプしている。

「ほら、ほら！ 早く早く！！」

「お、おい押すなってば！ それと飲み物を買わせろ！」

そして俺は飲み物を自販機で買い、吉井に背中を押されながらBクラスに戻っていった。

Bクラスに着いた俺と吉井。
俺がクラスに戻ってきたのを見て山吹が話しかけてきた。

「あ、おかえり根本君。遅かったけど途中で気分でも悪くなったの？」

「いや、ちょっとしたトラブルに巻き込まれてな」

「根本君根本君！ 昼ご飯はどこにあるの！？ ご飯ご飯！！」

「……………あ、アキ君！？ ど、どどどっしてここに！？」

俺の背後からひよこつと顔をだした吉井に驚く山吹。というか今、アキ君って言わなかったか？

「あ、和歩。久しぶりだね。実はね……………」

吉井がそう言って山吹に話を始める。

俺もどうしてああいう状況だったのか知らなかったから話を聞く。

どうやら吉井の下駄箱にラブレターが入っていてそれを妬んだク
ラスの奴らに追っかけまわされ、なんとか屋上に逃げ込んだが坂本
と姫路に待ち伏せされており、そして一悶着あつて姫路に破り捨て
られ、坂本に燃やされて灰にされた、と。

だが、その事を知らない他の奴らに追っかけまわされていた所に
俺の登場。あと俺が知っていると通りつてわけだ。

「と、まあ色々あったけどこうして根本君から昼ご飯を貰いに来たってわけさ」

「ラブレターを破られたのか。姫路もすごい事したもんだ」

やっぱり自分で渡したかったのだろうか？　だとしたらいらん事をしてしまったな。

「それにしても恐ろしいな、FFF団つてのは。なあ、山吹」

「……………アキ君、今月分もう使い込んだんですか？」

おかしいな、山吹の背中が陽炎で揺らいで見えるんだが…………？
どうやら勘違いじゃなさそうだな。吉井の奴も目を何度かパチパチさせて確認している。というか、山吹が怖い。

「あれほど無駄遣いせずにしっかりとやりくりしてって言ったのに……………目を離れた途端こうなるの？」

「い、いや和歩、そういうんじゃないんだ！　今月は欲しいゲームが多過ぎただけで普段はしつかりと……………」

「問　答　無　用です！　アキ君、少し私とお話しましょう」

「ちょ、ちよつと待って！　僕のお昼、昼ご飯が……！」

「山吹……………先に食べさせてやらないか？」

「根本君は黙っていてください！」

吉井のフォローを試みたが山吹の返しと睨みにあっけなく敗れてしまった。二度目になるが山吹が怖い。

「吉井、飯はしっかりとっておくからな。それじゃあ……………G
OODLUCK」

「根本君！？　そ、そんな……………」

「いいですかアキ君、私は言いましたよね……………」

そして山吹のありがたーいお説教が始まった。こりやいつまで続くんだろうな？　吉井の奴はあつという間に小さくなってるし。

でも山吹が心なしに嬉しそうに見えるのは何故なのだろうか。

「もしかして……………なあなあ、一柳」

「んゝ、なにかなゝ根本君？」

「山吹ってさ……………」

「あゝ、多分思ってる通りだと思うよゝ。和歩も面白い人に好意持ったよねゝ」

俺の質問に一柳は答え、むふふっと笑って何処かに出ていった。
そうか……………やっぱりか。

「こりや、ますますからかいがありそうだ」

俺はそう言っただけで山吹と吉井を見る。その光景は妻に頭の上からない夫。所謂、新婚夫婦のように見えて仕方がなかった。

8 問目 ある日の学園にて。 (後書き)

..... あれ、もしかして明久×和歩になる？

それと山吹さんばかりで他のオリキャラをあまり動かしてない.....

..... これも今後の課題ですね。
感想お待ちしています。

9 問目 清涼祭に向けて。(前書き)

上手なタイトルが思いつきません。

9 問目 清涼祭に向けて。

「知っていると思いますがもうすぐ清涼祭の時期です。2年生からは喫茶店といった食べ物を扱う出し物をする事が許されていますのでなんでも自由に意見を出してみてください」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

たった今、清涼祭、所謂文化祭ってやつだな。それについて先生の話が終わった所だ。

清涼祭の出し物、か……

あれ、たしか俺が読んだ小説の中には一つもBクラスの出し物なんて書かれてなかったよな？

「（おいおい、どーすればいいんだよ。勝手に決めちゃっていいもんなのか？）」

なんて事を考えながら俺は机に突っ伏していた。

「根本！ 根本！」

「んー？ なんだよ松永。俺は忙しいんだぞ？」

「嘘つけ、お前思いつきり机に突っ伏してたろ。いいからお前もなんかクラスの出し物の案言え」

「……………休憩所とか？」

「おま……………せつかくのBクラスなんだからもつと設備を有意義に使用おうと思えよ……………」

失礼な、これは俺が中学生だった時の文化祭の俺のクラスの出し

物だったんだぞ。勿論、根本に憑依する前の話だ。

「なあ」

突然野々村が立ち上がり皆に意見を言い始める。

「演劇やらね？ それも召喚獣使つてのバトル物だ！」

「演劇か……でも演劇部と被らないか？」

「それについては大丈夫だ。なぜか知らんが演劇部は清涼祭で演劇はやらないからな」

そういえばどの小説でも演劇部は清涼祭で発表してなかったな。というか演劇部が活動している話と呼んだ事がないな。

だがさらに他の疑問を抱いたクラスの女子が疑問を口にした。

「そっか……でも召喚獣出す時どうするの？ いちいち名前と教科言つてたら台無しじゃないの？」

「その時だけ英語で言うとか？」

「かけーけど、先生どうすんだよ……」

「そ、そうだな……」

むむ、たしかに俺達が英語で承認許可を聞いても先生の承認許可時が日本語だったら意味がないな。

それに先生が英語で答えてフィールドが形成されるのが問題だよな。

「あ、だったら劇開始前に先生にフィールド作って貰えばいいんじゃないか？」

「それ名案だな！ あ、でもそれって先生がしばらくクラスから動けなくなるんだよな」

一人の男子生徒が案を出したがそのデメリットに気づく松永。
だが先生はそんな事は大丈夫、といった感じで俺達に話しかける。

「それくらいなら構いませんよ。先生を振り回すのも青春ですからね」

なんて話のわかる先生なんだ。なんか感動してしまった。

「さっすが先生！ 話がわかるね！」

「俺、今はこのクラスで本当によかったって思えるぜ！」

先生は他のクラスメイトからも賞賛の言葉を受けている。
それを静止して仕切る松永。

「よし、それじゃあ文化祭の出し物は召喚獣を使った劇で決定だ！」

こうして俺達Bクラスの出し物は無事に決まった。まあ楽しそうだしいいかな。

「脚本どうすんの？」

「俺に任せとけ！」

次の日からBクラスは……

「ちょっと待て、敵役は最後補習室行きだよな！？」

「おいおいおい！ お、俺は嫌だからな！」

ちよつと壁にぶつかったりもしたけど……

「はいそこ！ 動きが固いよなにやってんの！」

「野々村君、イキイキしてるね……」

Bクラスは一丸となって……

「朝練だあ！ 毎日朝練するぞお！！ どんな理由だろうとすっぱかした奴は……」

「野々村、それはいいけど熱くなり過ぎ」

準備や練習はなんとか進んでいった。

そんなある日、俺はなんと寝坊してしまった。

「前触れもなく変な夢見て寝坊するのも学生の特権ってか！」

なんて事を叫びながらとにかく走っていた。今日は劇の朝練が、というか最近ほぼ毎日劇の朝練があるのだ。

「こりゃ野々村達になんて言われるかね……」

演劇の指導は野々村を軸にBクラスの演劇部所属がしてくれている。それくらいBクラスは本気って事だ。

「というか俺が悪役ってどういう事だよ……」

役決めの時、悪役を誰にするか決めようとした時、誰かが俺を推薦してなんと満場一致でそれがいいと意見が纏まったのだ。

と、いう事は試験召喚大会には出られないって事だ。

個人的には召喚獣を動かすのってかなり楽しい事だしどの小説でも根本は出場してたから俺も出場出来るんだろっ、と考えてた時期が俺にもあった。が！

「根本と一緒に出てたのはたしか小山なんだよな……」

俺と小山の関係は現在良い関係とは言えない。むしろ、というか完全に良くない関係だ。

「結局、大会には出られないって事だよな……はあ」

そんなこんなでがっかりしているうちに学園に着いた。時刻は八時五十分、完全に遅刻だなこれは。

これ以上走るのも疲れるから俺は歩きながらクラスに向かった。しかしふと校庭を見るとFクラスが野球をしているじゃないか。

「あいつらは本当に自由にやってるよなー あ、鉄人来た」

鉄人がやってきた途端、Fクラスは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。しかしそれを鉄人が逃がそうとはせず物凄い速度でFクラスの奴らを追いかけていった。

「俺もクラスに行こう」

多少道草を食ったけど俺は真っ直ぐにBクラスに向かった。

「ちいーす、遅れま、し……た？」

クラスに着き、扉を開けた瞬間クラスの視線が俺に集まった。しかもなにやら殺気立っている。

「珍しいじゃないか根本、寝坊か？」

「寝坊だよ、ところでなんで皆殺気立ってるんだ？」

「いやいや、実は今の時間は普通に授業だろ？でも先生が清涼祭前だし出し物の準備をしていって言うてくれたんだよ。そこで、だ」

「……そこで？」

嫌な予感しかないけど俺は野々村に聞き返してみる。

「この時間は召喚獣を使った演技の練習をしようと思う」

そして野々村の目がギラリと光った……ような気がした。そんな事だと思ったよ畜生。

そして机を後ろに纏めて始まった練習。ちなみに教科は総合科目だ。

だがあきらかにおかしい点がある。それは……

「絶対数がおかしいだろ！？大道具役の奴らも召喚してるよな！？」

「黒幕とは絶対的な強さを持ってないといけない……たしかにお前はクラス代表だ根本、だがな！この数相手に勝てない限り俺はお

前を認めない！」

「野々村、変なスイッチ入ってるぞ」

「行くぞ皆！ 大魔王ネモートを打ち取るんだ！！」

『おおおおおお！！』

「お前らはこの短期間で訓練され過ぎだろ！」

Bクラス代表 根本恭二 総合科目 2584点

VS

Bクラス 31名 総合科目 平均1561点

「勝てる気がしねーよ！！」

「そんな事を叫ぶ余裕があるのか！？」

思わず叫ぶ俺に構わず攻撃してくる他の奴ら。というか俺以外全員敵に回ってるよねおかしいよね！？

「すみません根本君！」

「山吹、お前もか！？」

山吹の召喚獣が放った弓が俺の召喚獣に突き刺さる、くっそ、100点程減ったか！

「そこだ！」

「な、なんだこれ！？」

「今だ、一柳！」

「はいよ」

今度は松永の召喚獣が鎖鎌で俺の召喚獣を拘束する。これじゃ身動きが取れない！　そしてそれを狙って一柳の召喚獣が雷を浴びせる。いつのまにか連携攻撃みたいな作りやがって！

「この程度でえええええ！」

俺の召喚獣が突然回り始める。突然の事に驚き、松永の召喚獣がそれに引つ張られて振り回される。

「おらおら、当たると痛てえぞ！」

「そんな攻撃ありかよ！？」

「人海戦術よかマシだろーが！」

そして自分の周りを開き、回った事で鎖の拘束が解けて松永の召喚獣は吹き飛ばされた。残念ながら戦死には至らなかったが。

「くっそ、まだ一人も倒してねーのかよ……こうなったら！」

「魔王は弱っている！　皆、一気にトドメを……」

「そうはいくかよ！　こいつがどうなってもいいのか！？」

俺が拘束したのは一柳だ。

一柳の腕を後ろに回し、首を締めるように俺の腕を回す……実際には締めていないがな。ちなみに一柳の召喚獣も同じ状況になっている。松永の鎖鎌を利用させてもらった。

「ごめんね、捕まっちゃったよ」

「くっ、卑怯な……」

念の為言わせてもらうがこれは演技だからな。いや、そりゃ本気

で身の危険を感じたのは否定しないがこれは演技だ。向こう側もそれを踏まえた上で攻撃している……はずだ、どう見ても数が多いけど。

「さあ、一柳の身の安全を考えるならお前らのやる事はわかってい
るな？」

「くっ、わかった、武器は捨てる。だから一柳を……」

「おっと、それじゃダメだ。実は俺は仲間同士の本気の戦いという
物が大好きでね。最近はそのをあまり観れてないし丁度いい機会だ。
この場でやつてもらおうじゃないか」

「くっそ……どこまでも卑怯な奴め！」

「そつだそつだ！」

「あんたの中には優しさつてもんが微塵もないのね！」
「感情無しー！」

すんごく心に突き刺さるが演技だからな！ 動じないぞ！ とい
うかこいつら演技とわかってるんだよな！？

「さあ、始めてくれよ。信頼する仲間同士の本気の殺し合いつて物
を！」

そして始まった味方同士の戦闘。……もしかして悪役つて俺のハ
マリ役なのかもしれない。

なんて事を考えていたら突如俺の背中に衝撃が現れた。

思わず体勢を崩す俺、そのせいで一柳の

拘束を解いてしまった。召喚獣側も俺の召喚獣の腰に山吹の召喚獣
の放った弓が綺麗に命中して拘束を解いてしまっていた。

「一か八かだったけど……成功してよかった！」

「ナイスだ山吹！ 皆、今こそ魔王にトドメを刺す時だ！ やるぞ

おおおおおおお！！」

『おおおおおおおおお！！』

「ここまでなのかよ……」

結局俺はミンチにされ、補習室行きとなった。

あいつら2点位でやめてくれるかな、と思った俺が間違いだった。
あいつら絶対に楽しんでやがった。

野々村の奴……この短期間でどんな練習させたらあんなにノリが
よくなるんだよ……！！ うん、決めた。清涼祭終わるまでは絶対に
寝坊しない。

9 問目 清涼祭に向けて（後書き）

ギャグ戦闘に挑戦してみました。

バカテスの二次創作を書く上で避けては通れない道だと思いましたので。

感想お待ちしております。

9・5 問目 今日はなんの日冷たい日？（前書き）

クリスマスです。

9・5 問目 今日は何の日冷たい日？

「寒い、外が。そして俺の心も寒い」

よお、俺だよ。

卑怯者と名高い根本に憑依した俺だよ。

時は何時の間にか十二月二十五日。

根本に憑依してから数ヶ月しか経ってない気がするのは気のせいなのだろう。

「こつちに来て一年足らずだぞ。ろんりークリスマスに決まってるだろ……」

そんなわけで一人でコタツでぬくぬくしてます。いや、憑依前とたいして変わらないのは事実なんだけだな。

「あつ、クリスマスってモンブランと響きが似てるな」

そんな事を考えながらコタツでぬくぬく。あー、この中は天国だよ。

「やべえ、モンブラン食いたくなってきた。どうしようすげー食いたい、今買いに言って食べないと後悔する気がする。どうしよう」

唐突にモンブラン衝動に駆られてしまった。だがこのぬくもりを手放したくない。うーん、困ったどうしよう。

「我慢して買いに行くしかないよな。着込めば寒さも大丈夫なはず、うん」

そう考えて俺は防寒対策をして家を出た。
うおっ、すげー寒い。さっさと行こう……

「畜生」

しばらく歩いて俺は呟いた。なぜかって？ お前そりゃ今日はクリスマス。そんな日にケーキなんて買いに行ったら周りの人混みはどんな奴らだと思う？ そうだ、その通りだ。

「カップルばっかじゃねーか……」

畜生、なんかパーティー途中に買い出しに行く事になったオーラ出そうとしてケーキ無駄に買っちゃったじゃないか。

「帰ろう」

周りの連中が怖いから早く家に戻る事にした。すんごく場違いな気がしたから。

「心身共に寒くなっちゃったよ……どーすんだこのケーキの数」

意味もなく大量購入したケーキ。ああ、今年も残り僅かとはいえ無駄な出費だったな……

「とりあえずモンブラン食べよう」

そう思っ て箱を開けようとしたら突然携帯にメールがやってきた。

「誰だ……？ 山吹からじゃねーか」

まさかこんな日にクラスメイトからメールが届くとは。

「なにになに……『急いで！ Bクラスで皆待つてるよ！ あと可能なら何か食べ物を！』……はあ？」

……とりあえず行っ てみるか。食べ物……ケーキでいいか。ところで制服で行っ た方がいいのか？

めんどくさいから結局私服で来てしまった。こんな所鉄人に見られたらなんと言われるか……

「えーっと、Bクラスに來いとか行っ てたな」

そう呟きながら俺はBクラスに足を運ぶ。

というかBクラスの電気付いてないじゃねえか。馬鹿馬鹿しい、帰ろっ かな。と考へて家に帰ろっ と体の向きを変えた途端、Bクラスの前が開き、中にいた誰かから腕を引っ張られてたちまち中に連れ込まれてしまった。

「え、ちょ、なに？ 何事だ！？」

「いいからこれ被って！ あとこれ！」

言われるがままに渡された何かを被り三角錐状の何かを持つ俺。
一体なんなんだ。

「皆揃った？」

「これで全員のはずだぞ」

「それじゃあいくよ……！」

そのその直後に様々な破裂音が響き渡る、と同時にクラスの光も
付く。そして呆気にとられた俺以外の皆が口を揃えて叫んだ。

『メリークリスマス！！』

「……………はい？」

…………イマイチ状況が掴めない。とりあえず手に持った三角錐はク
ラッカーという事はわかった。でもこれ一体どういう事なんだ？

「根本君！」

俺の名前を呼んだのは俺をここに呼んだ張本人、山吹だった。

「根本君！ クラス代表として皆に挨拶だよ！」

「ちょっと待て山吹。状況がよく読めんから説明してくれ」

「えっとね、実は私ちょっと前からクリスマスパーティーを考えて
たの。その為に先生に許可取ったり色々したりして…」

「クラッカーは先生が用意してくれたんだよ」

トンガリ帽を被った一柳が補足を入れる。

一柳、その格好だといつもより多めに不思議なオーラが出てるぞ。

「でも食べ物私個人じゃ限界あるし……皆で持って来てもらおう
と思ったの！」

「突然メールが来て驚いたな」

「でも暇だったしな」

そう言ったのは松永と野々村。

「というか山吹、そういう事は前もって連絡をだな……」

「さ、サプライズだよサプライズ！　そ、それより根本君何持ってきたの？」

「ん？　ああ、ケーキだよ。ちょうど良いタイミングで買いすぎて
しまってたな」

「嘘！　ケーキ！？」

「なにつ、ケーキだと！？」

「おい！　根本がケーキ持ってきたぞ！」

「さすが我らが代表さんね！」

そ、そんなに喜ばれるとアレだな、嬉しくなるな。間違えて買って
よかったと思えるな。

「根本、俺がケーキ置いておくから前に立って皆に何か一言言って
こい」

「おう、わかった。………松永」

「ん、なんだ？」

「先に食うなよ」

「食べねえよ!!」

そして俺はクラスの前に経ち皆を見渡す。うん、既にフライングで飲み食いしてる奴もいるけど気にしない。

「えーっと……………我らが山吹がクリスマスにこんな事を用意してくれました。はい山吹に拍手!」

パチパチパチパチ……

クラス全員から拍手が鳴り響く。

「二学期も終わって冬休みに入って残すは三学期のみだけど皆悔いのないように楽しもう。乾杯!」

『かんぱーい!!』

こうして始まったBクラスのクリスマスパーティー。

皆はすごく楽しそうだ。山吹はすごい、クラスを中心って感じだ。

「あつ、モンブランいただき」

「あ、おい一柳! それは俺のだ!」

なんて事を考えている内に一柳にモンブランを食べられてしまった。おのれ一柳! まあまだモンブランは四つほど残ってるからいい、け…………ど?

「このモンブラン美味しいな、どこのだ?」

…………松永が一つ。

「さあ？ 俺は知らねえ」

……野々村が一つ。

「多分ラ・ペデイスだよ。ほら、箱にも書いてあるし」

……山吹が一つ。

残るは一つ！ 希望を残してケーキが置かれた場所に向かいモンブランを取ろうとした瞬間、突如現れたその手は俺よりも素早くモンブランを奪い去った。

「いいですねー、青春ですよ皆さん。あ、モンブランいただきますよ」

……先生何やってんですか。

結局モンブランを食べる事は出来ず、俺は八つ当たり山吹をからかい続けたとき、畜生。

その後も騒ぎ続けた俺達はそろそろお開きの時間がやってきている事に気づいていた。

「そろそろお開きか？」

「そうだな、食べ物も殆どなくなってるし」

「でもさ、この勢いを止めるのは良くない気がするな」

畜生、なんだってこんな季節にクリスマスの夢なんかみたんだ俺の馬鹿！

やっべーよ、完全に怒ってるだろ野々村絶対キレてるだろ野々村が！！

俺は急いで登校用意をして家を飛び出した。

そして9問目に続く。

9・5問目 今日は何の日冷たい日？（後書き）

無理矢理感が否めない夢オチです。

一応9問目の補足的な意味も兼ねています。

今年の更新はこれにておしまいです。

それでは皆様メリークリスマス。そして良いお年を。

感想おまちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9225x/>

Bクラス代表の卑怯者に憑依した話

2011年12月25日12時47分発行